

通信



日 仏 東 洋 学 会

日 仏 東 洋 学 会

事 務 局

〒162 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学文学部
福井文雅研究室 Tel. 03.203.4141.

通信編集委員（五十音順）

興膳 宏， 高田 時雄， 中谷 英明， 羽田 正，
浜田 正美， 御牧 克己， 八木 勲， 山中 一郎

入会申し込み・会費納入（年会費 3,000円）

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学東洋文化研究所
羽田 正まで Tel. 03.812.2111.

『通信』の記事

〒673 神戸市西区伊川谷 神戸学院大学人文学部
中谷英明まで Tel. 078.974.1551.

目 次

羽田・榎両先生御逝去	3
追悼文 神田信夫 浜田正美 池田温 福井文雅	
第1回ラモット・シンポジウム『インド仏教史』	8
第10回南アジア考古学国際会議	9
最新号の目次 -フランスの雑誌から-	10
T'oung Pao - Turcica - Studia Iranica - Bulletin d'Études Indiennes	
フランス便り -1990年1月3日 G. FUSSMAN-	14
会員消息	15
会員の渡仏 「学術使節」としての帰国報告 福井文雅 新入会員・その他	
お知らせ	18
第6回日仏シンポジウムについて 日仏学者交換希望者募集 日仏共同研究募集	
前年度総会についての追録	19
編集後記	21

羽田・榎両先生御逝去

本会名誉会長羽田明先生（京都大学名誉教授）、会長榎一雄先生（東京大学名誉教授、東洋文庫理事長）は、昨年末、相次いでお亡くなりになった。

羽田明名誉会長（79歳）は、平成元年12月27日、肺炎のため、京都市北区の御入院先の病院で逝去された。

これに先立ち榎一雄会長（75歳）は、本誌前号で速報の通り、11月5日虚血性心不全のため、ご自宅で急逝された。

お二人ともその卓越したご学識のみならず、高邁なご人格によって会員に大きな影響と深い感銘を与えてこられただけに、本会の受けた衝撃には計り知れないものがある。

ここに謹んで哀悼の意を表し、お二人を偲んで幾人かの人々に綴って頂いた文章を収載する。

羽田明名誉会長追悼

「羽田明先生を偲ぶ」

神田 信夫

羽田先生に初めてお目にかかったのは、確か戦時中の或る日、東大の東洋史研究室に当時副手をしておられた泉（寺田）康順氏を訪ねて来られた際であったと思う。しかしこの時はご挨拶するかしないうちに出て行かれたので、お話をした記憶はない。実は先生のお名前ももっと早く、まだ中学生の頃から承知していた。というのは昭和十一年の夏に在外研究先のフランスから帰国した父が、殆ど入れ替わりに羽田先生がパリに留学されると話していたのを耳にしていたからである。初めてその風貌に接した先生は、かねて想像していた通り颯爽としていられたのが強く印象に残っている。その後、戦争末期に刊行された東亜研究所編の『清朝の辺疆統治政策』に先生の大作「異民族統治上から見たる清朝の回部統治政策」が発表されると、早速貪るように拝読した。

私は、清代の回部について有益な基礎知識を与えて下さったことを今なお有難く思っている。

戦後になると学会などでお目にかかる機会が増え、いつしかご高誼に与ることになったが、特に頻繁に接するようになったのは昭和四十年頃からである。その前年、故山田信夫君の首唱によりいわゆる野尻湖クリルタイが始まると、引続き東亞アルタイ学会が企画され、第一回の会議が京都で開かれた。その際、会場に羽田記念館が使われた関係もあって、羽田先生には何かとご厄介になった。ついて日本におけるアルタイ学研究会の連絡会議などでもよくお世話いただいたが、先生の肝煎りで初秋の貴船において合宿した楽しい思い出もある。また先生は京大を定年退官された頃から、毎月七月の野尻湖の集會に夫人や令息と共にマイカーを駆って来られるのが恒例となった。湖畔の宿で数日間ご一緒し、アルタイ学はじめいろいろ学問に関するお話を興味深く伺ったものである。

先生は晩年杏雨書屋の館長に就任されたが、同書屋の貴重書のコピーについて大変ご面倒をかけたことがある。それは書屋所蔵の旧恭仁山莊善本中の「天游閣集・東海漁歌」のコピーを、戦時中東大に留学していた内蒙古大学教授の金啓孫君から依頼されたからである。この書物は、乾隆帝の曾孫奕絵の側室で閨秀詩人として名高い顧太清自筆の詩集であるが、金君も乾隆帝の後裔に当たるところからコピーの入手を強く希望していた。私は羽田先生にご無理をお願いすると、ご親切にもあれこれご尽力いただき、お蔭で金君の長年の念願を叶えることができた。

ところで杏雨書屋には「格体全録」という満州語訳の人体解剖図の抄本が所蔵されているが、先年書屋の特別展示会に陳列された際に、先生はその覚書を展示会のパンフレットに書かれた。そして先生はこの書物の研究をさらに続けられ、東方学会創立四十周年記念の論文集に「満州語解剖書研究序説」と題して論文を発表された。恐らく先生の最晩年の論文であろうが、それに先立ち昭和六十一年五月に京都の東寺で開かれた東方学会の国際会議の帰途であったか、お茶を飲みながら本論文の内容について親しくお話を承った。私は曾ってデンマークの王立図

書館において同種の解剖図の抄本を閲覧したことがあるので、非常に面白く思った。なお先生のご好意により、杏雨書屋の本抄本の寫眞は現在東洋文庫の書庫に収められている。

私は先生の驥尾に附して東方学会の監事を長年共に務めたこともあり、先生の思い出は尽きないが、今はただご冥福をお祈りするばかりである。

「羽田明先生の 御逝去を悼む」

浜田 正美

本会名誉会長、羽田明先生は、年余の御闘病も空しく、旧臘二十七日ついに長逝されました。四半世紀近くも先生に親炙し、御学恩を忝なくした身には、悲しみは余りに大きく、哀悼の言葉を綴ることすら覚束なく感じられます。

羽田先生が日仏両国の東洋学の交流に果たされた貢献については、ここに改めて言うまでもありません。先生は両国学界の友情をまさに一身に体現して来られました。

羽田先生は、東京大学後卒業後、1936年秋から満二年、フランス政府奨学生としてパリに滞在され、当時のフランス東洋学の大師たちの講筵に列せられ、特に東洋語学校の Jean Deny 教授に師事してトルコ学を修められました。先生は時に留学生時代を懐かしまれ、トルコ人教師が著名な知識人 Adnan Advar 氏であったこと、若き日の B. Levis や D. Sinor が御同学であったことなど、折々に語られました。又、二十有余年の後、1964年にはパリ大学都市日本館の館長に就任され、旧知の方々は勿論多くのフランス人東洋学者と親好を深められました。Deny 教授の後継者である Louis Bazin 教授と御生涯の終わりまで変わることのなかった友情を結ばれたのもこの間のことであります。

先生は最初いわゆるウイグル文書の研究を志されたようですが、やがて比較的早い時期に、御関心を東トルキスタンの近世史へと向けられました。この分野での最初の御業績が「明末清初の東トルキスタン - その回教史的考察 -」であります。この論文

は、その副題からも明らかなように、とすれば中国の王朝と周辺地域との交渉史に傾き勝ちであった、いわゆる「塞外史」とは本質的に異なる、新たな境地を拓り開くものであります。先生三十二歳の折のこの御論考は、私ども後学のものの出発点であり、私どもは依然として、ここに先生が示された枠組みの中で右往左往しているに過ぎぬと思ひ知らされます。

その後、羽田先生は御関心の領域をジュンガル史、東西交渉史、そして就中トルコ族のイスラム化の問題へと拡大され、常に刺激に富んだ数々の御論考を発表されました。先生御自身は細微・精密な考証をむしろお好みの方でしたが、私どもには、透徹した洞察と雄大な構想こそが先生の御学問の本質であると思われまふ。例えば、オスマン帝国の「奴隷制」をも包括的に説明可能な「トルコ族に固有の奴隷制」を、東突厥に関する資料中から抽出された「マムルクとカブウ・クルラル」という御論考などを拝読すると、あたかも大空を飛翔する鷹が、獲物を目がけて一直線に地平へと飛んで行くのを見るような壮大な気分が致します。我々弟子どもは、常々「羽田先生の天翔ける構想力」と称して賛嘆すると共に、ひきくらべて、トボトボと地上を歩まねばならぬ身の不敏を嘆いたものでした。

先生の洞察力はおそらく天性のもので、研究中の問題などを少しお話し申し上げると、直ちに的確に問題点を指摘されました。その意味では恐い先生でありましたが、実際には学生を叱責なさったことなど絶えてありませんでした。先生は仲々の毒舌家でありましたが、同時にあらゆる人にわけへだてなく心を配っておられました。何かの集まりの折など、一人話題に加わずに沈黙している人が居たりすると、先生は話柄をそちらへ向けられるのを常にしておられました。先生の人に対する寛大さと公平さは、今の世に在ってまことに得がたいものであったと、先生を失って改めて思ひ知らされます。

古代トルコ族は、死者の霊は鷹に化して天に昇り、天そのものと一体になると信じておりました。先生の霊の果して天の一隅に留まっておられるなら、先生の飛翔の跡をたどる我々の地上の歩みを見そなわすよう心から祈って止みません。

榎 一雄 会長 追悼

「榎一雄先生を悼む」

池田 温

日仏東洋学会会長榎一雄先生は、平成元年（1989）11月5日、享年76歳をもって 忽焉としてこの世を去られた。その数日前には奈良の正倉院、ついで仙台の支倉常長記念展観と東奔西走の日々のあと、お一人住まいのマンションの一室で日曜のひる急性心不全で息を引き取られ、翌々日秘書の鈴木（旧姓大島）立子夫人が立ち寄り始めて遺体を発見されたのであった。まことに痛惜にたえない。

榎先生といえは必ず東洋文庫が念頭に浮かぶ。戦後の深刻な危機を克服しつつ、東洋学研究的メッカとしての東洋文庫を、50余年にわたり支え発展させてきた原動力こそ、先生の全身全霊をこめての奮闘であった。75歳の時、先生は〈自訂略年譜〉（16頁）と〈自訂著作略目（1988年8月現在）〉（58頁）を《榎博士頌寿記念東洋史論叢》（汲古書院、1988年11月、本文540頁）に付して公刊された。その年譜の最後に「思うに我が半生は東洋文庫の経営と維持とに終始し、自らの学業において果たすところ憾少しとせず。今、文庫のこと挙げてこれを後継の俊秀に託す。残年幾何なるかは知らざれども、仰視すれば北斗高し。」と結ばれている。先生は汲古書院と謀られ、すでに十余巻の著作集の構想を定め、旧稿の補訂に着手されていたのであった。その年3月、47年つれそわれた龍子夫人の長逝に遇われ、深い憂いをいだかれつつ一人暮らしの孤独に耐え、なお「我は衰朽に鞭って著述の事に力め、些かなりとも内子の信頼に対えんことを期す。」と自訂年譜に特筆された先生の心情をおもうと、万感胸をしめつけられる。天もし数年を先生に仮し、著作集を完成されたなら、世界の東洋学界に対しどれほど貢献をもたらすか量り知れぬものがある。

一 東洋学一般（研究史・動向等）

二 アジア史一般

三 アジア文化一般

四 東西交渉史（附マルコ=ポーロ等）

五 東アジア関係（1）支那関係（2）日本関係

六 北アジア・中央アジア・西アジア・南アジア関係（1）総説（2）北アジア関係（3）中央アジア関係（4）西アジア関係（5）中央アジア・西アジア方面に関連せる批評紹介その他（6）チベット関係

七 インド・インド洋・東南アジア関係

八 図書館・古文書館・書誌関係（1）東洋文庫（2）外国の古文書館その他（3）敦煌文書関係（4）書誌及び書誌序文

九 学者の追憶（1）日本人（2）外国人

十 雑文

の如く整然と分類され、辞典の項目等まで採録された著作略目を拝見すると、その学問のなみはずれたスケールに圧倒されるとともに、着眼の犀利と明晰さ、そして細事をゆるがせにせぬ着実周到な追求を兼ね備えた諸論考のかずかずが眼前に去来する。先生の著作は、たとえ個々の所説が後進により乗り越えられても、その比類ない博洽とバランス感覚の妙により、20世紀日本の生んだ稀有の学的成果として不滅の光芒を放つであろう。

1956年日仏会館館長L. Renou教授の示唆により日仏東洋学会が誕生して以来、代表石田幹之助教授を助け、先生は Bibliographie de l'Orientalisme Japonais, 1955の編纂に参加されたのに始まり、本会が改組刷新された1984年3月以来は会長の任にあって、多忙な中を5年有余会のために尽力されてきた。先生は旧制第一高等学校文丙を卒業され、フランス語・フランス文化に対し一定の親近感をおもちであった。両編の仏文論文

Les origines de l'empire du Japon. Cahiers d'histoire mondiale II-I, 1954, pp. 26-37.

Sur la date des Kidarites. Revue de collaboration culturelle Franco-Japonaise 28, 1972, pp. 45-57

を発表されている他、1971年には日仏会館から第一回学術使節Mission Academiqueとしてパリに赴かれ、l'Institut des Haute Etudes Chinoises で講演もされた。講演草稿にP. Demiéville教授が手を入れら

れ、あまりにも名文となり、読みながら何を言っているのかいぶかった箇所さえあった、と回想されたのを想い出す。またSylvain Lévyの論文を読むと、結末において艱苦の末頂上に出、四周の見晴らしを楽しむように視野が開ける感がある、と讃えられたことがあった。もとより先生はフランス一辺倒ではなく、イギリスのBoxer教授、イタリアのTucci教授やソ連のGafurov博士をはじめ、接する限りいかなる国の研究者とも胸襟を開いて交流に努められた。雄偉な体躯に恵まれ、誰にもききとりやすい意地の英語で話される先生の姿が、どれほど日本人参加者を勇気づけたことか！先生は日本人であると同時に国際人であり、剛毅でありながら情愛に富み、何よりも己の労苦を省みず、世の為学問の為に精進して止まぬ方であった。謹んでご冥福を祈る。なお、先生の2万冊をこえる全蔵書は東洋文庫に寄贈されたとき。

「羽田明名誉会長、 榎一雄会長との想い出」

福井 文雅

羽田明先生との初対面は、私が boursier（フランス政府留学生）であった最後の年、1964年の春にさかのぼる。木内義胤氏の後任として、奥様共々、パリ大学都市の日本館新館長として赴任して来られたのである。しかし、すぐにお会いした記憶が無い。多分、着任して来られた時が、丁度、日本館も私も大変な時期に当たっていたからであろう。京都大学大学院（フランス文学）からの同じ boursier 仲間の梅垣浩一君が、4月7日深夜2時頃、P.C. 路上で自動車事故を起こし、人事不省で入院したので、私達友人は彼の見舞いに追われる毎日だったからである。この事故は、直前まで一緒に飲んでいた私達友人からすると、今でも謎の多い事故なのであるが、それはともかく、当時のことであるから、なにごともし如意であった。留学生同士で助け合うほかはなかった。休みとなればイタリアなど方々を一緒に自動車

旅行した親友の為に、私は彌永康夫氏などと共に、大掛かりな救援組織を作り、5月19日朝に亡くなった後には、火葬に付して、日本館の大広間で、私が導師で葬儀を営んだ。

その葬儀の時に、羽田先生は弔辞を読まれた。「同じ京都大学の者として、君に会うのを楽しみにして来たのに、こういう形で逢おうとは---」と言った言葉で始まっていたように思う。

梅垣の話や少し長々と書いたのは、羽田先生と言うと、顔を上げ加減にして、話かけるように弔辞を読まれたあの日の先生のお姿が、その口調と共に、すぐに私の目には浮かんでくるからである。その時が初対面のはずしは無いが、それだけ印象的であったのである。

私は、日本館の隣りのイタリア館の住人であったから、毎日お会いするというようなことはなかったが、パリ大学からの帰りのバスやメトロではしばしばお逢いした。同じ東洋學だと言う親しさもあって、私は気楽に話をし、かなり勝手なことも申し上げていたようである。「あの先生は偉い方で、京都では怖い人で通っているのだよ」と、私の慣れ慣れしさを暗に批判する関西からの留学生もいた位である。しかし、怖いどころか、「ペリオは器用なものでね、晩年には甲骨文の講義もしていたよ。」などと、時々御自分の留学生時代のお話も洩らされて、私の耳学問を増やして下さったものである。

だから、日仏東洋学会が再発足するに当たって、先生を名誉会長に推戴することになった時、私は不思議な縁を感じたものである。パリ以来の因縁があって、先生は御自分の学生のように私を思って下さったのであろうか、日仏会館での総会開会の辞の中で、「福井君を助けて行ってやって欲しい(云々)」と言って下さった日の事が忘れ難い。

anciens boursiers（元・フランス政府留学生）の友の会や、日本館の旧在館生の会が組織されようとした時、先生は関西側を代表して、熱心に事に当られた。その名簿作りでしばしば御相談を受けたことが、今では懐かしい思い出である。その名簿は、草稿がようやく去年パリ側で完成した。

榎一雄先生との思い出は、1966年2月9日、恩師・故Paul Demiéville ポール・ドミエヴィル先生のお伴をして、東洋文庫に伺った時のことである。その時の状況が余にも鮮明なので、それが先生との初対面であったような錯覚にさえなるほどである。ドミエヴィル先生は、日本政府の招きで何十年振りかで来日され、東大と京大その他で講演されたのである。その通訳と接待役とに、故川勝義雄氏と一緒に私は当っていた。文庫での講演のあとでのお茶の一時、先生は突然「福井さん、文庫の資料はどんどん使ってくださいよ。」と、あの大きい声で言われた。初対面に近い、しかも若造の私に気軽に声を掛けて下さった時の光景は、その言葉の調子と共に、今でも鮮やかに思い出すことができる。

もう一つの鮮明な思い出は、日仏東洋学会の新発足に先立って、ある日の早朝、大地原豊先生と東洋文庫の(嘗ての)石門のところで待ち合わせて、御相談に伺った日のことである。当時の日仏東洋学会は全くの名目だけで、御病氣勝ちの辻直四郎先生に代って、榎先生が会長代理を勤めるだけの会であった〔再発足までの経緯は本『通信』第一号を参照〕。そこで、新発足に当って正式に会長になって頂いたら、と言う準備会の意向もあり、二人して伺い、今後の下相談などをしたのであった。

実は、榎先生御自身は、再発足にはかなり疑問をお持ちであった。何故ならば、印度学にしる中国学にしる、本学会が設立された昭和30(1955)年と比較すれば、今ではそれぞれが既に立派な学会を持ち、フランスとの交流も十分に出来ているので、本学会のraison d'être(存在理由)がいま一つはっきりしないから、と言われるのであった。「日仏間の“窓口”の役を直接果せる機関が、今でこそ更に必要なので」と言うこちらの説明で、その点は納得してくださり、「それでは、形だけでも付けておきますか---」と言って、会長就任を受諾されたのであった。

最初是这样して決っていられた会長職ではあったが、一旦お引受けになられると、一大責任感で終始された。奥様御入院中の大変な時期にも、学会の会

へは出席して下さいました。

先生は実に「寡言実行」の方であった。微塵の私心なく、大所高所から判断を下され、しかも(これがすごい点であったが)それを断固実行された。一昨年の日仏コロックの時、第一部会は、開催予備金の寄付を各方面にお願いしたことがある。その時、ポケット・マネーから真先に多額の寄付を送って下さったのが、榎先生であった。しかもそれは、一般の想像を遙かに超える「巨額」であった。そしてまた、お知り合いの会社社長や財団に働き掛け、紹介もして下さいました。そして更に、我々事務局をして真に敬服せしめたのは、その用途について、一切何の注文も追求も、見返りの要求もなかったことである。「金は出しても、口は出さない」— その徹底ぶりは恐ろしいほどで、これほど深い人に、私は未だ嘗て出会ったことがない。

先生は孤剣の古武士にも似て、厳しい風格の方であったが、しかし、威張るとか、変に権威振るとかするタイプとはほど遠い方であった。先生については、「威あって、猛(たけ)からず」と言う言葉をいつも思い出す。日仏コロックのレセプションではフランス語で淡々と御挨拶下さり、一方、会議中では常に中央に座して、適切な、ときには辛辣極まる評を寄せられた。世上、「高邁な識見の持ち主」と言う表現もよく用いられるが、その本物に接することが出来たのは、私共には人生の幸福であったと言える。令夫人を亡くされた直後のせいもあったろうか、伊東温泉郷でのコロック合宿と、昨春、京都での総会後の我々との夕食を、殊の外喜んでおられた姿が、今だに目に浮かぶ。

先生の学問については、津田左右吉先生が高く評価しておられたことを又聞きで知っていた。学問の上での先生との思い出も実は多々あるが、ここでの私の役割を越えるので、割愛する。

昨秋、学会に関する或る件で御相談したところ、これこれの手配をするように、といつものように早速返信を戴いた。しかし、それが最後であった。そのお葉書は十一月四日夕方の消印であるから、東洋文庫を出ての帰途に投函なさったのであろう。もし

かすると、先生の絶筆かもしれない。

こうして羽田、榎両先生についての思い出は尽きないが、お二人の亡き後、その大きさが、益々私には感じられるばかりである。

第1回 ラモット・シンポジウム 『インド仏教史』

ブリュッセル・リエージュ/1989年9月24日～27日

ユベール・デュルト

当学会は色々な好条件の中で行われました。欧州の秋晴れに恵まれ、会場となった場所はまずブリュッセルのマリア・テレジア学士院で、次には、リエージュ大学所有の「眠れる森の美女」を思わせるコロステル城でした。また、ブリュッセルで開かれていた「兵庫県の仏教美術展」は、学会に一つの華を添えることになりました。

この学会は三つの点で大変興味深いものとなりました。まず、一九八三年に亡くなられたラモット教授のための最初の国際的記念学会であったこと。次に、印度仏教の発展について様々な方法論が試みられたこと。そして、ベルギーの仏教学のみならず、ヨーロッパ統合の現時点に即した、フランス語圏仏教学の再統合への一里塚となったことでした。これらについて以下に順に少し詳しく述べようと思いません。

(一)、ラモット教授が他界された後、彼の先輩にあたる人々(G・ツッチ、E・ヴァルトシュミット)が次々に亡くなられた為に、当学会を構成したのは教授の後輩にあたる世代の研究者でした。発表は、平川彰氏、H・ベッヒェルト氏、D・セイフォート・ルエッグ氏、L・ザンダー女史、O・フォン・ヒンニューパー氏、P・S・ジャイニ氏、H・ブロンコースト氏、K・バッターチャーリヤ氏、K・

R・ノーマン氏、荒牧典俊氏、川崎信定氏、松村恒氏、藤井教公氏等、さらに、教授の弟子であった李箕永氏、加藤純章氏、A・ペザーリ女史、R・デュケーヌ氏とH・デュルトがおこないました。

(二)、当学会が発足するきっかけは、一九八九年に出版されたラモット教授の大著の英訳「印度仏教史第一巻」にあるといえます。といいますのは、教授が同第二巻の著述を断念されていたからでした。この第一巻が出版されてその重要性が益々認識され、更に、他の著作、「大智度論」仏訳第六巻(索引等)、同論のラモット訳註の英訳、又、小論文集等の出版が計画準備される中、国際的な協力によって、第二巻を作る計画がもち上がりました。しかし、このような計画はあまりにも無謀といえるものでした。そこで、その調整をも兼ねて当学会が開催されることとなったのです。ですから、この学会では、教授の大著第一巻の補填ともいえる古代仏教の新研究、そして、同第一巻の続編にあたる大乘仏教中心の新研究という二つの課題があり、発表のほとんどはこれら二つのテーマに沿って行われました。このことは、昨年十月十九日付けの中外日報に松村氏が詳しく報告しています。

また、この学会の紀要が発表され次第、我々のC・E・A・(フランス国立極東学院、京都支部の学報)に書評を載せ、批評する予定でいます。

(三)、山口益氏が初めて「ベルギー・フランス仏教学」の言葉を提唱されたことから窺えるように、ラ・ヴァレ・ブーサンとラモット教授らがこの学派的代表者であることは、日本の全ての仏教学者が御存知の通りです。しかし、ここでこの学派的再統合ということをするには、この学問の伝統の不幸な歴史を説明する必要があります。この起こりは、ラモット教授が名誉教授になられる少し前のことで、ルーヴァン大学がフランス語学部(U・C

・L・)とオランダ語学部(K・U・L・)とに分裂したことでした。その後、ラモット教授の有名な「仏教学講座」がなくなり、次いで、漢文学のR・シー教授の急死で、極東学科全体がなくなってしまいました。そして、その極東学科の再建を懇請することが、このシンポジウム開催の当初の目的の一つでした。

このような訳で、この学会への協力は各方面からもたらされました。まず、U・C・L・の東洋部の仏教学以外の教授達から、またリエージュ大学関係の人々で、ラモット教授の弟子でもある、阿闍如来經典に関する博士論文を書かれたJ・ダンツインネ博士、ミーマーンサーについて博士論文を書かれたJ・M・フェアポールテン博士、そして、英訳「印度仏教史」の索引を作成されたP・カース氏らの仏教学者達からもたらされました。さらに、ブリュッセル大学(U・L・B・)出身の印度考古学者(J・スコトスマンス氏、N・ポーツ・ピクロン博士)の参加も喜ばしいものでした。

しかし、誠に残念なことに、ベルギー国内で現在仏教学が最も活発なオランダ語のアントワープ大学とK・U・L・は参加ができませんでした。これらの機関には、ラ・ヴァレ・プーサンとラモット学派の直系に属さない、日本でもよく知られている漢訳密教学(アントワープのC・ウィルメン教授の学派)と中国・日本仏教史(K・U・L・のW・ウィン・ド・ウール教授)がありますが、折悪く、同時に開催された「ヨーロッパ・日本」の祭典に手を取られた形になってしまいました。ベルギー国内でそのような状態でありましたので、フランス語圏の仏教学からも多くの期待を望みませんでした。フランスからはA・パロー教授とK・バッターチャリヤ教授以外の参加を得られなかったことは残念なことでした。

しかし、この学会が明らかにしたように、現在

のドイツと北欧諸国において目ざましい成果を挙げつつある仏教学の飛躍は、汎ヨーロッパ的に見る必要があります。そして、全ヨーロッパ、ひいては全世界の学者の協力のもとに、ラモット教授等に代表されるフランス語学派の貴重な伝統の灯を、更に発展させる必要を痛感しています。

第10回南アジア考古学 国際会議

(The 10th International Conference of the Association of the South Asian Archaeology in Western Europe held at Paris)

パリ/1989年7月3日~7日

桑山 正進

CambridgeのDr. F.R. Allchinの首唱によってAssociation for the Promotion of the South Asian Archaeology in Western Europeの名のもとに第1回集会在1971年7月にChurchil Collegeで開催されてから、この集会で10回目である。South Asian Archaeology 19XXの書名を持つ8回の紀要10冊は、すでに南アジア考古学研究者必携の論文集となっている。本学会はとくに事務局、会員、会長を定めず、西ヨーロッパ各地で持ち回りで開催地の主な研究者が責任者となり、隔年7月上旬の5日間に国際集會を開催する。それによって、南アジア考古学者相互の情報交換、研究促進、研究者育成をめざす。いまや西ヨーロッパ以外からも参加者が増え、前回からは100名をこえ、回ごとに肥大していく。前回Veneziaにおける決定によって本集會は1989年7月3日から7日まで、ハラッパー研究者にしてMehergar遺跡の発掘者J.-F. Jarrigeの主催により彼のMusée Guimetで行なわれた。フランス革命200年記念行事寸前のこともあり、約190名の参加があった。内訳は、フランス45名、イギリス28名、西ドイツ25名、イタリア21名、合衆国21名、インド16名、オランダ12名、デンマーク6名、パキスタン6名、スリランカと日本各3名、オーストリア、フィンランド、ベル

ギー、スイス、ソヴィエト各1名である。そのうち研究発表は100名に満たなかった。多数の参加者のため、先史部門と歴史部門にわかれ、考古学の常識にしたがって前者は地下の講演室、後者は2階の閲覧室があてがわれた。先史部門は現在の発掘の成果を中心とした60の研究報告、歴史考古部門は、美術、図像学、仏教文献学、イスラームなども包含したきわめて広い範囲の研究発表40が、連日9時からだいたい6時ちかくまで行なわれた。発表は英語のみと規定され、すべて個人の研究であり、特定のテーマをもとにした討論はなかった。なお、今回は、Berlinにおいて、Prof. Dr. A.J. Gailの主催により Instiut fur Indische Philologie und Kunstgeschichte Freien Universitatで開催される予定である。

最新号の目次

— フランスの雑誌から —

フランスから出ている東洋学関係の雑誌のうち、主要なもの最新号の目次を順次ここに掲載してゆきたいと思っています。掲載する雑誌は、次のとおりです（括弧内は、日本語訳の担当者）。

1. T'oung Pao [通報] (高田時雄)
2. Turcica (羽田正)
3. Studia Iranica (羽田正)
4. Revue des Etudes Iraniennes (羽田正)
5. Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient (八木徹)
6. Journal Asiatique (御牧克己)
7. Bulletin d'Etudes Indiennes (中谷英明)

* * * * *

通 幸段 T'oung Pao, Vol.LXXIV

論文

Riccardo Fracasso, Holy Mothers of Ancient China. A New Approach to the Hsi-wang-mu. (古代中国の聖なる母、西王母への新たなアプローチ)
Liu Ming-wood, The Lotus Sūtra and Garland Sūtra according to the T'ien-t'ai and Hua-yen

Schools in Chinese Buddhism. (中国仏教の天台宗と華嚴宗における法華経と華嚴経)

Michael Loewe, Divination by Shells, Bones and Stalks during the Han Period. (漢代の甲骨及び筮竹占)

R.A.Stein, Les serments des traités sino-tibétains (8e-9e siècles). (唐蕃条約中の盟誓)

Madeline K.Spring, Fabulous Horses and Worthy Scholars in Ninth-Century China (九世紀中国における空想上の馬と名士たち)

Robin D.S.Yates, New Light on Ancient Chinese Military Texts: Notes on their Nature and Evolution, and the Development of Military Specialization in Warring States China. (古代中国の兵法書に対する新見解: その本質と展開、及び戦国時代における兵法の専門化)

Laurent Sagart, Nord et Sud dans la langue et l'écriture des Shang. (商代の言語と文字における北と南)

Donald Daniel Leslie et Ahmad Youssef, Islamic Inscriptions in Quanzhou, a review of Chen Da-sheng, Quanzhou Yisilan-jiao shike: Islamic Inscriptions in Quanzhou. (泉州のイスラム碑文: 陳達生《泉州伊斯蘭教石刻》を評す)

書評

John K.Fairbank, ed., The Cambridge History of China Vol.12, Republican China 1912-1949 Part I, par E.B.Vermeer

Morris Rossabi, ed., China among Equals. The Middle Kingdom and its Neighbors, 10th-14th Centuries, par H.T.Zurndorfer

John W.Dardess, Confucianism and Autocracy: Professional Elites in the Founding of the Ming Dynasty, par H.T.Zurndorfer

Patricia B.Ebrey, Family and Property in Sung China: Yüan Ts'ai's Precepts for Social Life, par H.T.Zurndorfer

Paul A.Cohen, Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past, par H.T.Zurndorfer

A. Cheng, Etudes sur le confucianisme Han:

l'élaboration d'une tradition exégétique sur les Classiques, par I.Robinet
 Tai-ching Hsu, The Chinese Conception of the Theatre, par W.L.Idema
 Wolfgang Kubin, Der durchsichtige Berg, die Entwicklung der Naturanschauung in der chinesischen Literatur, par W.L.Idema
 Kurt W.Radtke, Poetry of the Yuan Dynasty, par W.L.Idema
 John D.Langlois Jr., ed., China under Mongol Rule, par H.T.Zurndorfer
 Francesca Bray, in Joseph Needham, ed., Science and Civilisation in China, Vol.6 Biology and Biological Technology, Part II: Agriculture, par Dieter Kuhn
 Stephen C.Soong, ed., A Brotherhood in Song, Chinese Poetry and Poetics, par J.-P.Diény
 Chan Sin-wai, Buddhism in Late Ch'ing Political Thought, par M.Bastid
 Benjamin I.Schwartz, The World of Thought in Ancient China, par Jean Lévi
 Edward H.Schafer, Mirages on the Sea of Time, The Taoist Poetry of Ts'ao T'ang, par A.G. Blankestijn
 David Johnson, Andrew J.Nathan, Evelyn S. Rawski, eds., Popular Culture in Late Imperial China, par W.L.Idema
 Shuen-fu Lin and Stephen Owen, eds., The Vitality of the Lyric Voice, Shih Poetry from the Late Han to the T'ang, par W.L.Idema
 Victor H.Mair, Four Introspective Poets, A Concordance to Selected Poems by Roan Jyi, Chern Tzyy-arng, Jang Jeouling, and Lii Bor, par W.L.Idema
 Charles Hartman, Han Yu and the T'ang Search for Unity, par W.L.Idema
 Marie-Ina Bergeron, Wang Pi, philosophe du non-avoir, par Anne Cheng
 Kwong Hing Foon, Wang Zhaojun, une héroïne chinoise de l'histoire à la légende, par W.L. Idema

Jonathan Chaves(transl.and ed.), The Columbia Book of Later Chinese Poetry, Yuan, Ming, and Ch'ing Dynasties(1279-1911), Translations from the Oriental Classics, par W.L.Idema
 Roderich Ptak, Cheng Hos Abenteuer im Drama und Roman der Ming-Zeit. Hsia Hsi-yang: Eine Uebersetzung und Untersuchung. Hsi-yang chi: Ein Deutungsversuch, par W.L.Idema

* * * * *

TURCICA Tome XX(1988)

論文

Irène Mélikoff, Les origines centre-asiatiques du soufisme anatolien. (アナトリア・スーフイズムの中央アジア起源)
 Stéphane Yerasimos, De la collection de voyages à l'Histoire Universelle: la Historia Universale de' Turchi de Francesco Sansovino. (世界史における旅行叢書: フランチェスコ・サンソヴィーノのHistoria Universale de' Turchi)
 Suraiya Faroqhi, Agricultural Crisis and the Art of Flute-Playing. The Worldly Affairs of the Mevlevi Dervishes (1595-1652). (農業危機とフルート演奏技術。メウレヴィー教団の俗事)
 Ruth Roded, The Waqf and the Social Elite of Aleppo in the Eighteenth and Nineteenth Centuries. (18-19世紀アレppoにおけるワクフと社会的エリート)
 Pierre Voillery, Une ville bulgare à l'époque ottomane. Eski Zaara (XVIIIe -XIXe siècles). (オスマン支配期のブルガリア都市。Eski Zaara (18-19世紀))
 Ilhan Tekeli and Selim Ilkin, War Economy of a Non-Belligerent Country. Cotton Textiles: from Production to Consumption. (非交戦国の戦争経済。綿織物: 生産から消費まで)
 ノートと資料
 N.Beldiceanu, Irène Beldiceanu-Steinherr et P. S.Nasturel, Les recensements ottomans effectués en 1477, 1519 et 1533 dans les provinces

de Zvornik d'Hérzégovine

C.G.Brouwer, A Stockless Anchor and an Unsaddled Horse: Ottoman Letters Addressed to the Dutch in Yemen. First Quarter of the 17th Century.

Mahmut Sakiroglu, La bibliothèque nationale d'Ankara

書評

J.P.Laut & K.Röhrborn, ed., Der türkische Buddhismus in der japanischen Forschung, par L.Bazin

A.Brayer D.Winfield, The Byzantine Monuments and Topography of the Pontos, par N.Beldiceanu

R.Yinanc, M.Elibüyük, Kanuni devri Malatya tahrir defteri, par N.Beldiceanu

E.Balta, Karamanlidika, par N.Beldiceanu

I.H.Uzunçarsili, I.K.Baybura, O.Altindag, Topkapi Sarayi müzesi osmanli arsivi katalogu, par N.Beldiceanu

I.P.Theokharidis, par G.Grivaud

J.R.Barnes, An Introduction to Religious Foundations in the Ottoman Empire, par R.Deguilhem-Schoem

D.Kushner, ed., Palestine in the Late Ottoman Period, par E.Benbassa

H.Gerber, Ottoman Rule in Jerusalem, par E.Benbassa

A.Cohen et G.Baer, eds., Egypt and Palestine, par E.Benbassa

Z.Çelik, The Remaking of Istanbul, par S.Yerasimos

S.E.Tabachnik, Explorations in Doughty's Arabia Deserta, par M.Gunter

* * * * *

Studia Iranica Tome 18 (1989)
Fascicule 1

論文

L.P.ALISHAN, Rostamica 1: On the Epithet Taj.

bakhsh (ロスタム研究 1: タージ・バフシュという通り名について)

W.SMITH, Early Persian Works on Poetic and their Relationship to similar Studies in Arabic (詩学に関する初期ペルシア語作品とアラビア語の類似研究との関係)

Y.PORTER, Un traité de calligraphie attribué à Abd-Allah Seyrafi (アブダッラー・セイラフィのものとのされる書道論)

M.SZUPPE, Un tremblement de terre dans le Qohestan, 956/1549 (コヘスターンにおけるある地震, 956/1549)

M.HANEDA, La famille Huzani d'Isfahan (15e-17e siècles) (イスファハーンのフーザーニー家 <15-17世紀>)

D.MAC EOIN, Divisions and Authority Claims in Babism (1850-1866) (バブ教における諸分派と權威の主張 <1850-1866>)

書評

H.J.KLIMKEIT, Manichaean Art and Calligraphy, par Ph.GIGNOUX

Ph.GIGNOUX, Incantations magiques syriaques, par Rika GYSELEN

M.ALAM, Nomina propria iranica in nummis. Materialgrundlagen zu den iranischen Personennamen auf antike Münzen, par Rika GYSELEN

D.SELLWOOD, P.WHITTING & R.WILLIAMS, An Introduction to Sasanian Coins, par Rika GYSELEN

NASR, S.H., Editor, Islamic Spirituality: Foundation "World Spirituality. An Encyclopaedic History of Religious Quest" 19,

par Guy MONNET

Brigitte MUSCHE, Vorderasiatischer Schmuck zur Zeit der Arsakiden und der Sasaniden, par Rika GYSELEN

M.I.MOCHIRI, Arab-Sassanian Civil War Coinage. Manichaeans, Yazidiya and other Khawarij, par

Rika GYSELEN

Carol BIER, Woven from the Soul, Spun from the Heart, par Ph.GIGNOUX

* * * * *

論文

- Michel Angot, Un manuel de tonalité: la Svara-siddhāntacandrikā de Srinivāsadikṣitā. (アクセント概論書: シュリーニヴァーサディークシターの「スヴァラ・シッダーンタ・チャンドリカー」)
- Philippe Benoit, Rāmāyaṇa de Vālmiki et Rāmāyaṇa (bengali) de Kṛttivāsa. (ヴァールミーキの「ラーマ ヤナ」とクリッティヴァーサの(ベンガル語)「ラーマヤナ」)
- H.C. Bhayani, The Śūdravatsa-kathā and its various versions. (シュードラヴァツァ・カタートとその諸異本)
- H.C. Bhayani, Dhavalas in Prakrit and Apabhraṃśa and post-Apabhraṃśa traditions. (プラークリット、アバ プランシヤ、及びアバプランシヤ後の伝承中のダヴァラ歌謡)
- Johannes Bronkhorst, Etudes sur Bhartṛhari, 1. L'auteur et la date de la Vṛtti. (バルトリハリ研究1: ヴリッティの作者と年代)
- Hélène Brunner, L'ācārya śivaite: du guru au gurukka. (シヴァ教のアーチャーリヤ: グルからグルッカルへ)
- Bruno Dagens, Les tours à visage du Bayon d'Angkor et le nombre 108. (アンコールのバヨンの顔面彫りの塔と108という数)
- Hélène Diserens, Les pierres funéraires de Mandi et Nagar en Himāchal Pradesh. (ヒマチャル・プラデシュのマンディとナガルの墓石)
- Harry Falk, Vedische Opher im Pali-Kanon. (パリー聖典中のヴェーダ祭式)
- Pierre-S. Filliozat, Calculs de demi-cordes d'arcs par Aryabhaṭa et Bhāskara I. (アーリヤバタとバースカラ1世による半弦の計算方法)
- Jean Haudry, Les Aśvins dans le Ṛgveda et les Jumeaux divins indo-européens. (「リグヴェーダ」中のアシュヴィン双神と印欧語族の双生神)
- Stanley Insler, Les dix étapes de l'amour (daśakāṃavasthāh) dans la littérature indienne. (インド文学における愛の十段階)
- Christine Kontler, Note sur le prodige comme manifestation de l'incocevable dans le Vimalakīrtinirdeśa. (「維摩經」における、理解を絶することの現れとしての奇跡についての覚書)
- Hisashi Matsumura, Encore à propos d'un fragment du Mahāsāṃghika-Vinaya. (再度「大衆部ウィナヤ」の一断片について)
- Edith Nolot, Derecochef à propos d'un fragment du Mahāsāṃghika-Vinaya (更に「大衆部ウィナヤ」(?)の1断片について)
- 講演
- George Morgenstierne, Sten Konow (「ステン・クヌーヴ」)
- 書評
- V. Varadachari, Institut Français d'Indologie: Catalogue descriptif des manuscrits, Vol. II: Mss 116-275, par G. Colas.
- Siegfried Lienhard, Nepalese Manuscripts, Part 1: Nevāri and Sanskrit (Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Berlin), par J. Fezas
- Naresh Kumar, Apabhraṃśa-Hindi-Kośa, par N. Balbir
- George Cardona, Pāṇini: His Work and Its Traditions, Vol. 1., par P.S. Filliozat
- Sanford B. Steever, The Serial Verb Formation in the Dravidian Languages, par P.S. Filliozat
- L. Sternbach, ed., Mahāsubhāṣitasamgraha, Vol. 6, Subhāṣitas n. 9980-11491, par P.S. Filliozat
- M. S. Menon, ed., The Subhadrāharāṇa of Nārāyaṇa with the commentary 'Vivarāṇa', par P.S. Filliozat
- H.C. Bhayani and R.M. Shah, eds., Dharmasenaṅga-ni Mhattara's Vasudehahimḍi Madhyama Khaṇḍa, par N. Balbir
- M.V. Patwardhan, ed., The Gāhakośa of Hāla (Sātavāhana) par N. Balbir
- H.C. Bhayani, ed., Tārāyaṇa (Tārāgaṇa), par N. Balbir

- Stanislaw Schayer, Sur la philosophie des Hindous (1), choix d'articles, par J.P.Osier
- G.Vallin, Lumière du Non-dualisme, par J.M. Verpoorten
- J.M.Verpoorten, Mimāṃsā Literature, par G. Gerschheimer
- B.K. Matilal, Logic, Language and Reality. An Introduction to Indian Philosophical Studies, par J.M.Verpoorten
- V.N. Jha, The Philosophy of Injunctions, par J.M. Verpoorten
- Vrajavallabha Dvivedah, Yoginihrdayam, par A. Padoux
- J. Martin, Introduction au bouddhisme, par E. Nolot
- Shindo Shiraishi, Buddhist Studies, par C. Caillat
- H. Matsumura, The Mahāsudarśanāvādāna and the Mahāsudarśanasūtra, par E. Nolot
- L. Schmithausen, Alayavijñāna. On the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy. Part 1: Text. Part 2: Notes, Bibliography and Indices, par J.M.Verpoorten
- S.G.Tulpule, Mysticism in Medieval India, par P.S. Filliozat
- K.Schomer and W.H., Mcleod, eds., The Sants in the Northern Indian Tradition, par D. Matringe
- D. Rahbar, tr., Urdu letters of Mirza Asadu'llah Khan Ghalib, par D. Matringe
- L. Blusse et al., India and Indonesia from the 1920s to the 1950s, par D. Matringe
- H. Einzwann, Ziarat und pir-e-murdi. Golra Sharif, Nurpur Shahan und Pir Baba: drei muslimische Wallfahrtstätten in Nordpakistan, par D. Matringe
- Literatura: kul'tura drevnej i srednevekovoj Indii, par P. Reichert

フランス便り

<1990年1月3日>

Gérard FUSSMAN

1989年度の編成替はいま終わりました。9月26日付でご要請がありましたので、その結果をお送りします。パリ・インド学の新しい研究組織の一覧を添えておきます。ただしCNRS番号は未決定です。3月にならなければわかりません。

Institut d'Asie の旧 Ecole Polytechnique (52, rue du Cardinal Lemoine, 75005 Paris) への引越し作業が始まりました。これに伴い3月末まで図書室は閉室です。

Avenue Wilson 22 番地には、EFEO (新院長 Vandermeersch 氏)、インドシナ半島研究班 (Mme Blondeau) が残ります。空いたところには代わって、現在 Raspail 通り 54 番地にある現代中国資料センター (Mme Bergère) が入ります。

CNRS のトルコ学の二研究班 (Bazin-Hamilton 班と Bennigsen-S.Veinstein 班) は S. Veinstein 氏を班長とする一つの研究班に合併されました。

敦煌班 (Soyrié-Magnien) および Société Asiatique は、Institut d'Asie とともに、旧 Polytechnique の建物に移ります。

インド学博士は廃止となり、代わってパリ第3大学所属の東洋学 (アラブ、イラン、インド、ヘブライの諸学) を一つにした東洋学博士が新設されました (1989年10月1日実施)。

L. Bazin 氏と Schipper 氏は目下、1991年パリで開催予定の日仏ロックの準備中です。Schipper 氏はこの件に関し、12月にパリに立ち寄られた福井氏と話し合いました。

櫻氏の逝去を知りました。大きな喪失です。では皆様によろしく。

追伸

電話番号が変わりましたのでご承知下さい。

Collège de France, standard:

(16-1)44 27 12 11

Collège de France, Fax:

44 27 11 09

* * *

LISTE DES EQUIPES DE RECHERCHES INDOLOGIQUES
PARISIENNES
au 1 janvier 1990

- Centre d'études de l'Inde et de l'Asie du
Sud. Laboratoire associé CNRS-Ecole des Hautes
-Etudes en Sciences Sociales

Maison des Sciences de l'Homme

54, Bd. Raspail 75006 Paris

Tél. 49 54 23 56

Directeur: Eric MEYER, Directeur de recherches
au CNRS.

Importante bibliothèque.

- Equipe de recherches associée CNRS-Paris III:
"Langues, textes et civilisations du Monde
Indien"

Université Paris III, 113 rue de Santeuil
75231 Paris Cédex 05

Responsable: Marie-Claude PORCHER, Professeur
de sanskrit à Paris III.

- Equipe de recherches associée CNRS-Collège
de France: "Langue, culture et société dans le
sous-continent indien"

Collège de France.

11 Place Marcelin Berthelot,

75231 Paris Cédex 05

Tél. 44 27 10 07

et

Institut de Civilisation Indienne du
Collège de France

52 rue du Cardinal Lemoine, 75005 Paris
(avec une importante bibliothèque)

Responsable: Gérard FUSSMAN, Professeur au
Collège de France.

-Ecole Française d'Extrême Orient
22 Avenue du Président Wilson,
75116 Paris
Tél. 45 53 21 35

Importante bibliothèque.

Directeur: Léon VANDERMEERSCH, Directeur d'Etude
des à la 5e section de l'EPHE.

-Musée Guimet

Place d'Iéna, 75116 Paris

Tél. 47 23 61 65

Directeur: Jean-François JARRIGE, Inspecteur
Général des Musées Nationaux.

Importante bibliothèque.

-Institut de Civilisation Indienne du Collège
de France

52 rue du Cardinal Lemoine, 75005 Paris

Importante bibliothèque.

Président du comité scientifique de gestion :
André BAREAU, Professeur au Collège de France

会員消息

○会員の渡仏

「学術使節」としての 帰国報告

福井 文雅

「文部省補助金による学者交換」と言う制度があり、日仏会館ではそれによって、毎年「学術使節」mission scientifiqueをフランスに派遣している。(フランスから日本への招待の場合もあるが、ここではその場合の説明は省略する。)それへの応募は会員総会の度毎に呼び掛け、また、その通達は『通信』にも度々転載してきたところである。

ところが、去年三月の总会総会での決議の結果、去年十二月、不肖私がその資格で派遣されることに

なった。そこで、責務の一端として、ここにその報告を手短かに書くこととしたい。

本学会の再発足以前には、東洋学に関しては、榎一雄、池田温の両会員が既にその任に当られたことがあるが、その後は、本学会からの学術使節は出ていない。従って、私の体験談をここで述べることは全く意味の無いことでもないであろう。

1.

私は進んで自身から応募したわけではない。しかし、『通信』第九号 p.5, p.7 にいくらか書いたような複雑な経緯があり、私が辞退するならば、後の応募者の道を塞ぐことは明白であった。そこで、榎会長の強いお勧めに従い、去年三月の本会総会での御推薦を受諾したのである。その結果、榎一雄学会長名で候補者推薦状が日仏会館に出され、日仏会館学術委員会で選考があった。学術使節としての正式依頼状が届いたのは、五月末のことであった。

候補者としての応募書類には、現職・専攻・略歴・所属関連学会・主な業績・渡仏希望の時期・渡仏中の学術交流予定・受入れ先・(日仏会館関連学会のなかでの)推薦学会名・会長名・印を記した。必要な箇所のみフランス語で、あとは全て日本語で書いた。渡仏の条件としては、東京・パリ往復航空券が支給され、滞在費として、年長者の場合は、一日15,000円で10日以内(滞在日数分)が支給される

(中堅の方には、一日1万円が30日以内が支給される) ことになっている。そして、三月中旬までに任務を済ませ、帰国後10日以内に渡仏報告書(400字詰 5枚前後)を提出しなければならない。

学術使節の資格は、「日仏会館の会員である日本の学者で、フランスの大学等で講演、セミナー等を開き、日本の研究状況をフランス学界に伝えていただけの方」となっている。「日本の研究状況をフランス学界に伝えるのが任務であるとするならば、最適の場はフランスの「Société Asiatique アジア協会」であろう、と私は考えた。幸いに私はその会員でもある。

講演題目は Etudes japonaises sur les religions de la Chine : passé et présent 「日本の中国

宗教研究 : その過去と現在」とした。私の研究領域は広義での「中国学」であり、現在の専門は中国思想・宗教史であり、留学生としては l' Ecole Pratique des Hautes Etudes (国立高等研究院) 宗教研究部門の titulaire になっているので、このテーマが自他共に最適と判断したのである。フランスの中国学が、中国思想・宗教史研究では昔から世界の第一線にあることは、言うまでもあるまい。

二、三のフランス人有力学者に打診したところ、そのテーマで大変結構だ、という返事であったので、そのつもりで準備をしていたところが、かつての同級生で、今では Hautes Etudes の教授になり、昨年秋に中国高等研究所所長になったシペール K. M. SCHIPPER 君から電話が入り、アジア協会の月例会は「高度に専門的な研究発表の場だから、別のテーマに替えた方が良い。日本の学界状況の報告については、別に場を設けるから。」と忠告してくれたのである。

フランスで暮らした方ならば、多かれ少なかれ体験されたことであろう—この種の行き違いはフランスでは日常茶飯事である。そこで、アジア協会では(シペールその外の注文を入れて) Le Sūtra du Coeur de Xuanzang (602 ?~664) 「玄奘の般若心經」の題目で発表にすることになった。

唯一つ少し困惑したことは、発表要旨をこの二三日中に送れ、全会員に配っておく必要があるから、と言う注文も、併せて来たことである。テーマを変えての昨日が今日の要求では、これは無理な相談なので、発表当日に持参すると言うことで勘弁して貰った。

2.

渡仏期間は12月6日から20日であった。アジア協会例会は毎月第二金曜日の17時から開始、と決まっている。そこで、私の発表日は着いた翌日の8日であった。毎月二名ずつの発表であり、ベルナル・フリュザン Bernard FLUSIN 氏の Démons et Sarasins 「悪魔とサラセン人」と題する文献研究に続いて、私の発表は丁度18時から約35分間、質疑を入れて45分くらいで終了した。この時間配当は、前も

って訊ねておいたものである。仏文原稿もそれに合わせて作成して行った。

実は、1963年12月の月例会に、偶々訪欧した父が招待され、留学中の私も同席を許されたことがある。会長のセデス教授から全員に紹介され、ルヌー教授、ラルー女史その他高名な学者とお逢いした。私は講演の枕にその貴重な思い出話を振って、その同じアジア協会の、同じ12月の月例会で自分が発表することになった奇しき因縁から話を始めた。実は、私の発表内容も一種の因縁話だったのである。

玄奘がインドへ出発する時、或る僧から般若心經を口授された、と言う逸話は有名である。しかし、現在の般若心經は、玄奘がインドから帰国してから漢譯された、と言うのが定説である。それでは、インドへ唱えて行った般若心經とは、一体なんであったのか？ と言う謎を解こうとしたのが、今回の私の発表であった。私の結論は、それは鳩摩羅什訳の般若心經で、しかも、その中の密呪を唱えて行ったのだ、とするものであった。発表内容の詳細に入ることは差し控えるが、敢えてこの問題を選んだのは、この問題の解明には、中国仏教史や敦煌写本、『西遊記』などの中国の小説類、日本の仏教儀式などが係わって来るからである。つまり、この謎の問題であれば、アジア協会会員に満遍なく興味を懐いて貰えるのではないかと期待したからである。

発表の要旨と、参考資料と文献とを載せたプリントを日本から用意して行って、参会者に配付し、それに拠りつつ述べた。

司会は演壇中央のアンドレ・カコ会長 André CAQUOT が務め、向かってその左にルイ・バザン副会長 Louis BAZIN, その隣りに(つまり左端に)発表者、会長の右にミシェル・スワミエ書記 Michel SOYMIE が同席する、といった構図であった。

発表後の質疑応答では、シペール、フランク B. FRANK, ロベール J.-N. ROBERT の三氏から、コメントと質問とが出、閉会後にも、出席会員から多くの質疑を受けた。発表原稿は、アジア協会機関誌 Journal Asiatique に寄稿の予定である。

3.

学術使節としての講演は、12月13日17時から、質疑を含めて約1時間半近く、Collège de France, Institut des Hautes Etudes Chinoises (コレージュ・ド・フランス、中国高等研究所)の講堂で行った。この研究所は Instituts d'Asie (アジア会館)内にあるが、かつてはソルボンヌの地階にあり、そこで父が1963年12月12日16時から、Problèmes fondamentaux concernant les recherches sur le taoïsme (道教研究の基礎的諸問題)と題する講演を45分間なし、私が通訳した場所である。先のアジア協会と同じく、この符合を奇異に感じたものである。

それと共に、このアジア会館では Revue bibliographique de Sinologie (中国学文献目録雑誌)の編集にアルバイトとして参加した思い出もある。

それらを前置きにして、私は Etudes japonaises sur les religions de la Chine : passé et présent 「日本の中国宗教研究 — 過去と現在 —」について話した。司会はジェルネ教授。時間の制限から、話題は中国仏教史と道教とに絞り、戦後の主要刊行物のリスト(これが喜ばれた)を配って、研究動向の変遷と現在の問題点とを説明した。

講演後、歓迎レセプションが催された。それは光栄であったが、同時にそのお蔭で、フランスの東洋学者や昔の同級生、旧友各位と、一夕で広く交歓できたことは、望外の喜びでもあった。

中国高等研究所はその後 52, rue du Cardinal-Lemoine, F-75005, Paris に移転したので、そのレセプションは、あの会場を使った最後のものになった。ペリオその他歴代のフランス東洋学者の肖像を飾った二階の大広間もこれで最後か、と言う思いが、参会者全員の胸に過ったようである。

以上二回の発表の間には、早大からの特定研究補助金によって、フランスの地方都市図書館の二、三とバリ、ヴァチカンの図書館とに赴き、イエズス会士将来の所蔵漢籍の調査にも従事した。その間のことは本稿と関係ないので省略するが、La Vaticanaへの入り方はかなり難しい、と言う伝説があるので、今後の参考までに、私の体験談と見聞とを早大東洋

哲学会『東洋の思想と宗教』第七号に寄稿したことを記すに留める。

こうして、短い日数の中では欲張った日程ではあったが、年末無事に帰国した次第である。「学術使節」として大過なく任務を果せたとするならば、それは日仏会館と本学会をはじめ、フランス側学者諸氏など、多くの方々の御後援の賜物である。この場を借りて、関係者各位に厚く御礼申し上げたい。

付記一 日仏会館前館長の Léon VANDERMEERSCH レオン・ヴァンデルメルシュ教授（中国学）が、昨秋から Directeur de l'Ecole française d'Extrême-Orient（極東学院院長）に就任された。

また、同じく秋から Kristofer SCHIPPER クリストファ・シペール教授（中国学、特に道教研究）が、バリの中国高等研究所所長に就任した。

○新入会員（平成元年後期）

ジ'ラ'ホ、フレ'リ'ック

（フランス極東学院

研究員、日本の仏教・思想・哲学）

武内 紹 人

（京都教育大学、助教授、チベット語学）

吉 田 豊

（神戸市外国語大学、助教授、

イラン語学）

斉 藤 希 史

（京都大学大学院、

中国文学）

○住所及び所属の変更

添付しております新名簿をご参照下さい。

なお喜多村恵子氏の住所が不明となっています。

ご存じの方は高田時雄幹事まで連絡下さいますよう。

○退会者

岸本良彦、松島英子、三根谷徹の各氏。

○訃報

インド文学専攻の田中於菟弥氏は、昨年7月12日逝去された。

お知らせ

-第6回日仏シンポジウム について

本誌前号に報じました通り、1991年秋にフランスで開催が予定される第6回日仏学術シンポジウムに関して、昨年12月12日の日仏関連学会連絡協議会において申請受付が行われました。本会からは、故榎会長、学術使節としてフランス滞在中の福井代表幹事に代わって、羽田正幹事が出席し、本会の活動状況（会員120名、講演会年2回、学会通信年2回）を報告するとともに、次回シンポジウムには、本会からも参加する意向を伝えました。

本会では、Louis BAZIN 教授（パリ第3大学）の呼びかけに応じ、現在、次のような部会が企画されています。

主題：中央アジア・東南アジアにおける諸宗教の発展と交渉

参加予定者：

中央アジア地域

御牧克己（京都大学）、浜田正美（法政大学）
庄垣内正弘（神戸市外大）、高田時雄（京都大学）、
吉田豊（神戸市外大）、杉山正明（京都女子大）、
中谷英明（神戸学院大）

東南アジア地域

石沢良昭（上智大学）、坪井善明（北海道大学）
石井米雄（京都大学）、寺田勇文（上智大学）
加藤栄一（東京大学）、矢沢利彦（埼玉大学）
川並宏子（ロンドン大）、渡辺文夫（奥羽大学）

まだ計画として決して固定したわけではありませんので、参加希望、提案などお寄せ下されれば幸いです（本会における窓口には、神戸学院大学中谷が当たっています）。

＝日仏学者交換希望者募集

日仏会館学術委員会

(1) 日仏会館の会員である日本の学者で、フランスの大学その他で講演、セミナーなどを開き、日本の研究状況をフランスに伝えていただける方に、東京・パリ間往復航空券、滞在費を支給する。

(2) 業績の注目されているフランスの学者で、日仏会館、大学などで講演、セミナーなどを開き今後の日仏学術交流推進に寄与していただける方に、東京・パリ間往復航空券、滞在費を支給する。

(1)、(2)の場合とも、1990年度(1991年3月31日)までに事業を完了せねばなりません。

*上記に関する申し込み希望者は、本会代表幹事宛に至急、下記の書類を送付下さい。本会推薦委員会で検討の上、適当な方を日仏会館学術委員会に推薦致します。

なお、各学会からの日仏会館に対する推薦締切は4月28日となっています。

(1)の場合：a.滞仏希望者の略歴、業績リスト。
b.滞仏時期と学術交流予定。

(2)の場合：a.招待希望者の役職、専門領域。
b.日本側受け入れ責任者。
c.滞日時期と学術交流予定。

また上記とは別に、フランス政府より日本に派遣される学術使節の人選については、6-7月頃に各学会の要望の問い合わせがある予定です。ご希望をお持ちの方は予めご検討下さい。

－日仏共同研究募集

日仏会館学術委員会

特定の主題を定めて日仏両国の研究者が協力し、一貫した研究事業を行う目的のために、共同研究を助成する。

(1) 1991年度採択予定件数：2件。

(2) 助成金(1件1年50万円以内)を支給するほ

か、次の便宜を供与する。

- 1) フォアイエなど研究室の利用。
- 2) シンポジウムなどの会場の斡旋。
- 3) 参加する主要な研究員若干名を会館研究員として委嘱する。

*申し込み用紙は、本会代表幹事までお申し越し下さい。

前年度総会についての追録

福井 文雅

前回の総会内容については、『通信』第10号の報告でほぼ尽きていますが、しかし意外な誤解や不徹底をその後知りましたので、ここでそれを補足しておきたいと思います。それは、事務局が全部京都へ移った、と言う誤解。事実そうであれば、私などには有り難い話なのですが、日仏会館との関係や諸般の事情から、直ちにそうは出来まい、との御意見が多く、相変わらず事務局は私の研究室内にあります。

役員の変更の主要点を判りやすく申しますと、先ず幹事が〔abc順・敬称略〕、福井文雅、浜田正美、石沢良昭、加藤純章、前田繁樹、御牧克己、森安孝夫、田中文雄、山中一郎(9人)であったものが、福井文雅、羽田正、浜田正美、石沢良昭、加藤純章、御牧克己、中谷英明、高田時雄、八木徹、山中一郎(10人)に変わったことです。そして、事務局の庶務幹事に中谷英明、高田時雄(主に通信事務担当)、会計幹事に羽田正が新たに任じました。そして、関西側では興膳宏会員が総括し、事務の代表役に当ります。そこで、同氏は監事にもなり、従来の監事の一人の池田温氏は新設の推薦委員会委員に転じたわけです。

新しい顔触れを見ますと、関西方面に全部、事務局は移ってしまったのではないか、と思う会員もいるかもしれませんが、しかし、羽田正、浜田正美両氏は関東在住です。両氏のように、関西を熟知している方が関東にいたることが、どんなに本学会にとっては得難いことなのか、先のコロック開催までに東西

を結んで浜田正美氏が果された重要な役割を知っている事務局長の私は、この新役員の陣容に大いに期待するものです。

本学会は昭和58年(1983)夏に新発足しました(詳しくは、『通信』第一号を参照)。当時再建に関係した行き掛かりもあって、「学会の基礎が固まるまで」とか、「日仏コロックが終るまで」とか言うことで福井は事務局長を務めて来たのですが、「どなたかに交替して戴きたい」と役員会では繰り返し辞任を申し出ても認められず、居残っているに過ぎません。

事務局長の仕事には、学会事務の他に、日仏会館や学術会議その他の学会からの連絡事務の処理や、日仏関連学会連絡会への出席、お役所からの問い合わせへの返事、他機関との交渉の仕事、フランスへの事務連絡などがあります。川勝、内田、羽田、榎の諸先生の急逝も、国際電話でフランスの然るべき方々へ連絡致しました。大体が速やかに対応しなければならない場合が多く、問題によっては、会長や然るべき役員や事務局幹事に相談して即決しなければならない場合もあり、この種の仕事が意外に多く、且つ重いのです。

そこで、去年三月の総会席上で、事務の役割分担を決め、学会事務局のみで果していた『通信』編集事務・発行の事務は、関西西部会の方々が肩代りして下さることに決まったわけでして、事務局長としては実に有り難いことで、関西西部会の関係者の方々には深く感謝申し上げます。

しかしながら、福井が編集に無責任になったわけではなく、日仏東洋学会あての書類や連絡文書は全て事務局へ廻って来ますので、それらを読んで、会員に周知すべき事柄は記事として、『通信』編集委員に送付して、遺漏の無いように気は配っているつもりです。事実、前回の第10号にしても、興膳宏監事、中谷英明幹事と福井との間で密接に交渉はとりながら完成させたものです。但し、連絡の来るのが遅れる場合も多く、どんなに努力しても、会員への通知が年度はずれになる場合があります。そのような連絡は毎年のことなので、既に『通信』のなかで

繰り返し書いたことですが、改めて御留意下さい。

なお、「事務局長」は日仏会館関連諸学会に共通のsecrétaire généralの訳名なのですが、その呼称について東京での役員会で疑義が出て、関西での総会を経て、「代表幹事」に変わりました。他の関連学会の例などを参照にしました。

事務局の実務の多くが関西西部会に移行するに際して忘れてならないのは、それまでの、いわば草創期の事務局を支えて来た初代幹事の弥永信美、川崎ミチコの両氏と、その後を引き継がれた前幹事の前田繁樹、田中文雄両会員との功績です。去年、新名簿を全会員にお届けしましたが、それは、ひとえに前田繁樹幹事の努力によって、あのように美しく、且つ安価に出来たものでした(彼は、乏しい学会費の中から一番良い用紙を探そうと東奔西走しました)。その上、彼は、全会員の名簿をフロッピーに入れて、またしかも、それで打ち出した宛名ラベルの一回分も添えて、次の幹事に渡してくれました。次回からの通信事務がこのフロッピー一枚のお蔭で如何に容易になるかは言わずもがなでしょう。一方、田中文雄会計幹事は学会の会計の基礎を築き、かなりの剰余金をさえ学会に残して去って行きました。また、山田利明会員は私の依頼をいつも快く引き受けては、陰に陽に学会に奉仕して下さいました。このような方々、その他、新旧役員の方々の献身的な御助力無くしては、到底学会の維持・運営は覚束なかったでしょう。事務局長としましては、僭越ながら会員の皆様に代わって、心からなる謝意を表させて戴きます。

—1990・1・7 記—

編 集 後 記

陽光が戻り、木々の芽もふくらむころとなりました。皆様ご健勝のことと拝察致します。

この号は、本会名誉会長と会長の追悼号となりました。

ご多用の中、記事をお寄せ下さった多くの方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

前号アンケートにも多数の方々からお返事を頂き、有難うございました。しかし残念ながら、この号が追悼号となりましたために、ご業績、近況など掲載する余白がなくなっていました。ご回答下さった方には申し訳ありませんが、次号に回させて頂きますので、その後の追加等がありましたら、どうか再度お送り下さい。

次号にも記事をどしどしお寄せ下さいますよう。パソコンまたはワープロをお持ちの方は、下記の要領で打ち出したものをお送り頂ければ幸いです。

NEC PC-98をご使用の場合は、「一太郎」により以下の設定でお書き下さい。

用紙サイズ : A 4 1行文字数 : 46
1ページ行数: 41 上端マージン: 23
下端マージン: 27 左端マージン: 32
右端マージン: 90

ワープロの場合は、1行文字数を23として下さい。

もちろん手書き原稿でも結構です。ご協力をお願いします。 (H.N.)

日 仏 東 洋 学 会 通 信 第 1 1 号
1990 (平成 2) 年 3 月 29 日 発 行

編 集 兼 日 仏 東 洋 学 会

発 行 者 福 井 文 雅

本 部 : 〒 1 0 1 東 京 都 千 代 田 区 神 田 駿 河 台 2 - 3 日 仏 会 館 気 付

発 行 所 〒 6 7 3 神 戸 市 西 区 伊 川 谷 神 戸 学 院 大 学 中 谷 英 明 研 究 室

℡ . 0 7 8 9 7 4 1 5 5 1

印 刷 所 〒 5 3 0 大 阪 市 北 区 浪 花 町 9 - 1 2 - 4 0 2 六 稜 舎 (℡ . 0 6 3 7 1 1 6 8 1)
